廣瀬淡窓旧宅
配置図と建物

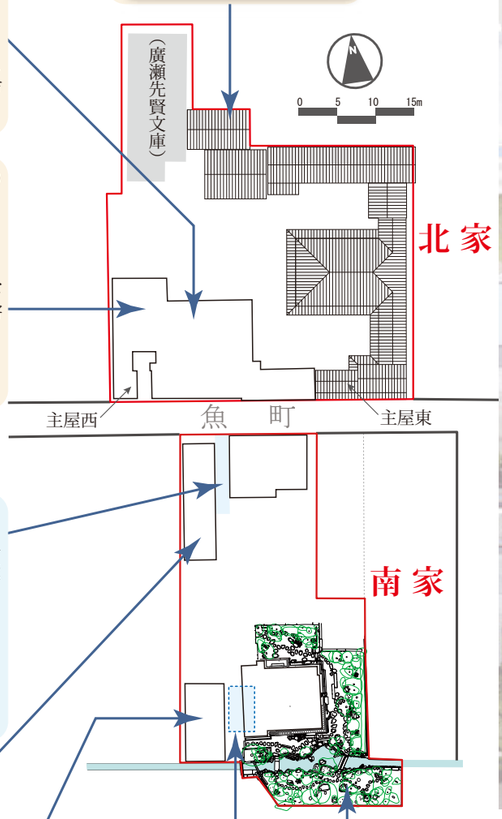
4 号 蔵 ③
建築履歴
天保 4 年 (1833) 建築(棟木墨書)
建築特徴
廣瀬家の土蔵の中で、棟木墨書によって建築年代がはっきりと分かる最古の建築遺構。梁が太い点に特徴がある。

3 号 蔵 ④
建築履歴
18 世紀後半と推定(棟木墨書等なし)
建築特徴
淡窓が居住していた頃の蔵で、廣瀬家のなかで最も古い蔵の可能性が高いもの。大梁などが太い特徴をもつ。

2 号 蔵 ⑤
建築履歴
弘化 3 年 (1846) 建築(棟木墨書)
嘉永 7 年 (1854) 改築
(棟木墨書／「久兵衛日記」)
慶応 4 年 (1868) 増築
(棟木墨書／「本家日記」)
建築特徴
現在、廣瀬資料館 2 号館として公開されている。増築によって 2 棟の土蔵が接続されて 1 棟となっている。

主 屋 ①
建築履歴
安政 3 年 (1856) 建築(棟木墨書／「久兵衛日記」)
元治元年 (1865) 西側増築(棟木墨書／「本家日記」)
慶応 3 年 (1867) 東側増築(棟木墨書／「本家日記」)
建築特徴
外観を『廣瀬家家訓』の「住宅外面は中塗までに止め、上塗をかけない」に従って中塗とし、1 階正面に土戸(防火扉)を備えることに特徴がある。

座 敷 ②
建築履歴
天保 4 年 (1833) 建築(棟木墨書／「淡窓日記」)
建築特徴
ザシキと次の間の 2 間からなり、柱は細く、大きな面をもつ。ザシキと次の間境の欄間は透かし欄間とし、数寄屋風とする点に特徴がみられる。



新 座 敷 ⑥
建築履歴
嘉永 6 年 (1853) 建築(棟木墨書／「本家日記」)
元治元年 (1865) 増築(棟札／「本家日記」)
昭和 13 年 (1938) 改築(棟札／「本家日記」)
建築特徴
現在、廣瀬資料館 1 号館として利用されているが、当初材が残る小屋組は梁が太く、土蔵に近い堅固な造りに特徴がある。安政 5 年 (1858) に岡藩の能役師を招いて能楽(舞囃子)が催され、町中の人が見学に訪れている。また、嘉永 7 年(1854)には府内の「琴名人」安藤姉妹を招いて三味線が披露されるなど、芸能の「場」として機能していた。

淡窓の歩いた路地 ⑦
淡窓は咸宜園に転居した後も、度々廣瀬家南家を訪れていた。とくに南家隠宅に行く時には、南主屋と 6 号蔵の間にある路地を通っていた。この淡窓が通った叩き土間の路地は、今も当時のままで残っている。

南 主 屋 ⑩
建築履歴
文久 3 年 (1863) 建築(棟木墨書／「本家日記」)
建築特徴
主屋同様に外観を『廣瀬家家訓』に従って中塗とする点に特徴がある。

6 号 蔵 ⑧
建築履歴
文久 3 年 (1863) 建築(棟木墨書／「本家日記」)
建築特徴
土蔵内部が 2 区画に分かれており、2 階も 2 区画に分かれていたが、現在は往来できる。土戸をもつ点に特徴がある。

7 号 蔵 ⑨
建築履歴
嘉永 2 年 (1849) 建築(棟木墨書／「久兵衛日記」)
建築特徴
他の土蔵と比べて、曲がりの大きい太く立派な梁や桁を使用している点に大きな特徴がある。

「南家土蔵」跡推定場所 ⑬
淡窓が廣瀬家に居住していた頃に頓宮四極から講義を受け、また自ら講義を行った「南家土蔵」跡で、嘉永 3 年 (1850) に久兵衛が隠宅を建築する際に取り壊された。この隠宅を建てる際の絵図面には「隠居蔵」と書かれており、「久兵衛日記」には支えが必要なほど傷みがひどかった土蔵であったと記されている。南家の建物記録や土蔵の建築年数からして、後に「隠居蔵」と呼ばれた土蔵が「南家土蔵」と考えられている。その場所は、絵図面から 7 号蔵のすぐ東にあたり、梁行き 2 間、桁行き 3 間の畳 12 畳ほどの広さと推定されている。

隠 宅 庭 園 ⑫
建築履歴
嘉永 7 年 (1854) 庭築(「久兵衛日記」)
庭園特徴
水路の幅を広げて水の流れに変化をつけた「流れの庭」で、築庭当時の 2 つの石橋が残り、隠宅から望む開放感あふれる造りとしている点に特徴がある。廣瀬資料館には築庭当時の「隠宅花庭図」が残っており、マキ・カシ・ヒノキ・モミヂ・ウメ・ツゲ・オモト・モッコク・ツツジ・サクラなどが植栽されていたことがわかる。南画家の木下逸雲が庭園をモチーフに絵画を描いた記録が残っている。

隠 宅 ⑪
建築履歴
嘉永 3 年 (1850) 建築(棟木墨書／「久兵衛日記」)
建築特徴
嘉永 3 年から 7 年までの 5 年を要した建築物で、茶空間を有する数寄屋風の建物遺構に特徴がある。建築主の 6 世久兵衛は、ここで岡藩の茶師千寿宗弥を招いて茶稽古を行い、詩を詠み、華を生ける など文化的な生活を送った。この隠宅には、淡窓もしばしば訪れて花見をしている。

廣瀬淡窓旧宅の敷地略年表

延宝元年(1673)	初代当主・五左衛門が「北家」の間口 3 間の土地を購入する。屋号を初めは堺屋、後に博多屋とする。
延享 2 年(1745)	3 世久兵衛が「北家」西隣を購入して間口 6 間となる。
宝暦 8 年(1758)	「南家」3 間を購入する。「南家」3 間を追加購入し、間口 6 間となる。
安永 4 年(1775)	4 世平八 (月化) が「南家」6 間を購入し、間口 12 間となる。
天保 4 年(1833)	7 世源兵衛が「北家」を間口 9 ～ 12 間に拡張する。
弘化年間(1844 ～ 1847)	間口 18 間に拡張する。